



『鹿谷校区』をたずねて

鹿谷校区は姫路市夢前町の東北部、旧鹿谷村の領域である。土地の大部分は中国山地に連なる山地で、雪彦山を源流とする夢前川が中央部を南流する。また、地域の南端付近を横ずれ活断層として知られる山崎断層線が東西に貫いている。断層活動によって破碎された地層は侵食作用を受けやすく、ケルンコルと呼ばれる小さな峠地形が発達して古くから播磨内陸の交通路として利用されてきた。現在は中国自動車道や県道三木山崎線がこれに沿っている。

鹿谷の名は、奈良時代に編纂された『播磨国風土記』の飭磨郡（飾磨郡）の中に賀野里とみえるのが最も古い例である。しかしその記事はごく簡単であり、また平安時代の『和名抄』（『倭名類聚抄』）の郷名にはみえないので、当時の正確な領域はわからない。

平安時代末期に飾磨郡が東西に分かれたので、当地は飾西郡に属した。また、平安時代末期の養和元年（1181）には新熊野社領の賀屋荘が成立していたことが知られている。領家は変わるが、この荘園は中世を通じて存続し、南北朝時代には本荘・あ□の・新荘の3地域からなっていたという。また、中世末には豊岡付近が播磨国一宮・伊和神社の荘園になっていた時期があり、山内・新荘・神種・前荘・古知荘を賀野郷と称したともいうが、詳細については明確でない点が多い。地域内には当時の山城や構居の跡が点在する。

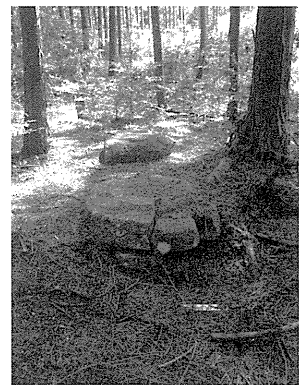
近世にはこの地域は前之庄・新庄・神種・山之内の4か村となって姫路藩に属した。この時期には新田開発が進むなど、経済の基盤が拡大した。明治22年（1889）、4か村が合併して鹿谷村が生まれ、旧村はそれぞれ大字となって飾西郡（明治29年の郡制の実施以後は飾磨郡）に属した。その後、昭和30年（1955）に置塩村・菅野村と合併して夢前町となった後、平成18年に姫路市と合併して現在に至っている。

周囲の山地からは良質の木材を産し、夢前川が刻んだ小平野では米をはじめ諸種の農産物が生産され、養鶏業も盛んである。南部には鉱泉が湧出し、塩田温泉郷の一角として観光ホテルが立地する。清流で知られる夢前川や日本三彦山の一つである雪彦山には、遠近から多くの人たちが訪れる。

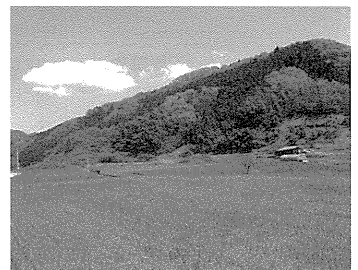
三枝草や新庄の獅子舞に代表される民俗芸能や年中行事など、伝統的な文化が今も生活の中に息づいている。

万丈寺廃寺① 地区の南端にあるホテル夢乃井の駐車場から、遊歩道を東北へ登った丘陵上に人工的に削平された地点があり、整形された礎石や布目瓦などが発見された。伽藍配置などは不明で創建の時期は確かではないが、白鳳あるいは奈良時代のものであろう。この地域で確認された最古の寺院跡である。

神種銅鐸出土地② 銅鐸は弥生時代に作られた青銅器で、梵鐘を押しつぶして扁平にしたような形を持つ。祭祀に使われた楽器の一種でないかと考えられている。発見例は畿内を中心とし、特別な祭祀跡などを伴わない場所から単独で出土することが多い。神種銅鐸もその一つで、明治20年頃、山仕事に来ていた村人が、神種の集落の西方約500mの小高い山の北側斜面で偶然に発見したという。昭和20年に戦災で消失して実物は現存しないが、研究者による報告書が残されている。それによれば、やや黒味を帯びた暗緑色で全長35.5cm、重量3.6kg、中型の菱環紐2式2区横帯文とよばれる様式のものであった。この地方の古代を物語る遺物である。



①万丈寺廃寺



②神種銅鐸出土地付近

神種神元神社大杉

③ 神種の村の西北の山裾に鎮座する神元神社の境内にある巨木である。目通り周囲が5.6m、樹高約42mで、校区内で最大級の巨木である。神木として保存されており、現在も樹勢は旺盛である。



③神種神元神社大杉

④ 前之庄の北西にそびえる標高約668mの山で、遠方からもその秀麗な姿を望むことができる。円錐形の頂上部から左右対称に裾野が広がる、神南備山の形をしているが、古代人はこのような形の山に神がやどる、あるいは降臨すると信じていたと考えられている。『播磨国風土記』に登場する伊和大神やその家族神の多くが山の上に出現することや、今でも山や巨石をご神体とする神社が少なくないことなどを考えると、播磨はその傾向が強かったらしい。この山も古くはそのような信仰の対象であったと思われる。



④明神山

⑤ 天神社鳥居(右)と天神山城跡(左奥)



⑤天神社鳥居(右)と天神山城跡(左奥)

⑥ 天神社



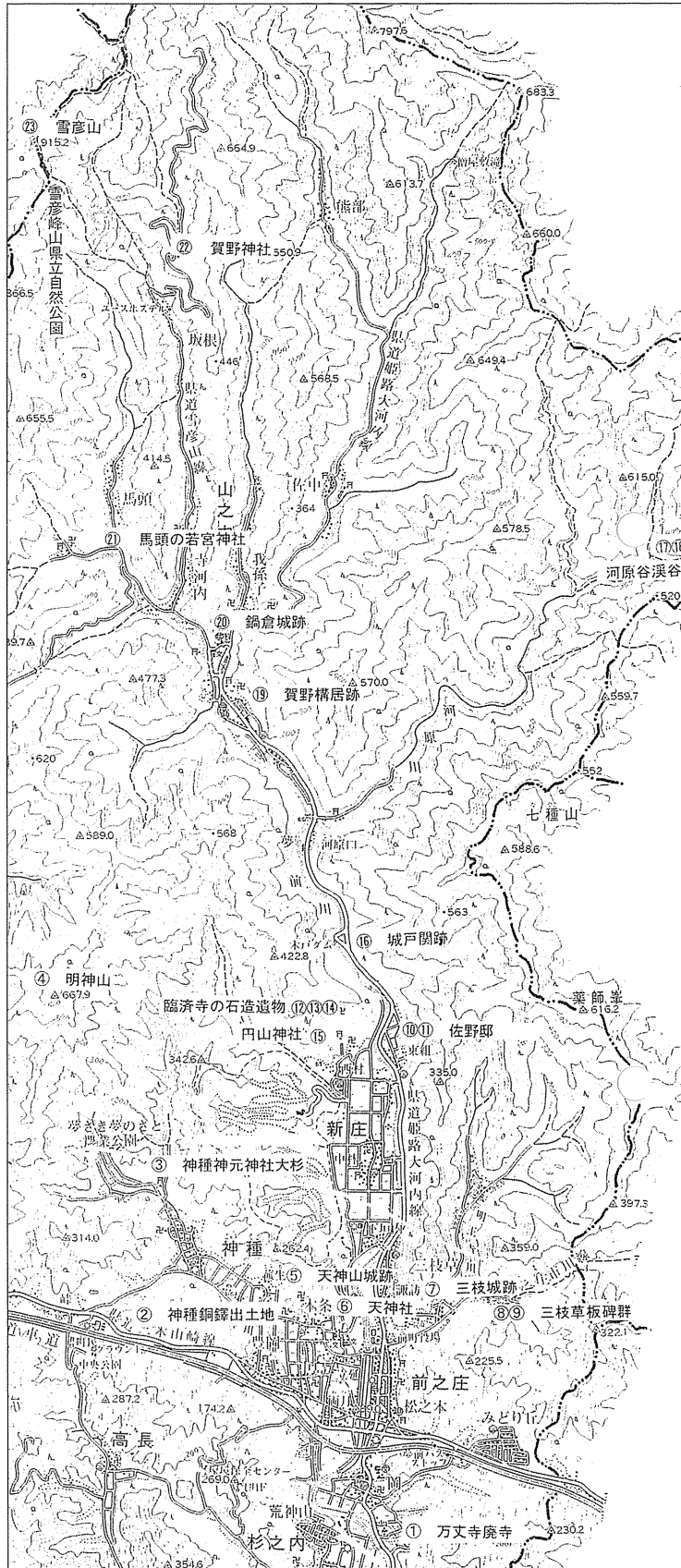
⑥天神社

⑦ 三枝城跡



⑦三枝城跡

⑧ 天神山城跡 ⑨ 三枝草板碑群

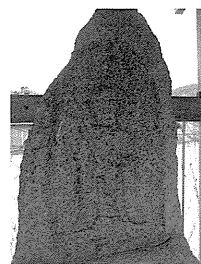


鹿谷校区の文化財地図

三枝草板碑群⑧ 三枝草の集落の東方、板坂峠を経て神崎郡福崎町に通じる古道の北西側に、4基の石塔が覆屋根で保護されている。いずれも厚さが20cm前後の板状の石塔で、道路補修で現在の位置に移される以前は道の反対側に露天で並んでいた。向かって左端の一基は上端を山形に削って下方に二条線を施し、その下の塔身部分に四角の枠線を刻んでいる。4基の中では板碑の特徴を最もよく表現しており、枠の中には種子(サンスクリット文字)を刻んでいたのではないかとも思われるが、風化が進んでいるので明確ではない。その右側の**地蔵像⑨**は高さが約1.5mで三角形の頂部を持ち、これも板碑を意識して作られたもののようである。塔身に当たる部分に蓮華座に立つ地蔵尊の像容を陽刻し、その下に「一見仏身示除衆罪 敬白 至徳三年十二月」と刻んでいる。至徳は南北朝時代の北朝の年号で1386年にあたる。さらにその右側の2基も同様の石塔である。建立者は不明だが、峠道を通る旅人の安全を祈る意味もあってここに建てられたのではないかと推測される。板碑は関東地方に多く、県内では例が少ない遺品である。

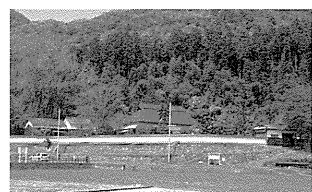


⑧三枝草板碑群



⑨至徳3年の地蔵像

佐野邸⑩ 新庄の北端に近い、夢前川東岸の高台にある。正徳元年(1711)、姫路藩主榊原氏の新田開発の求めに応じてこの地に移り住んだ佐野玄意正春の住宅である。長屋門や、表裏とも三間続きの居室を主とする母屋、土蔵や庭園などが残っており⑪、当時の庄屋クラスの豪農の生活ぶりを今に伝えている。昭和63年に旧夢前町に寄附され、合併により姫路市に移管した。(市指定文化財) 水・金・土・日の週4日は一般に公開されている。



⑩佐野邸



⑪佐野邸 母屋と庭園

臨濟寺の石造遺物 新庄北東の山麓に始まる参道の奥、木立の中に臨濟寺がある。赤松円心の孫の義則が別峯大殊円光国師を招いて開いた寺院で、現在の本堂は延宝3年(1675)に姫路藩主松平直矩が再建したものである。寺院裏の墓地には開山の**別峯国師の無縫塔⑫**がある。この無縫塔は最上部に置かれた塔身部分が卵形をしているので卵塔とも呼ばれる。単制と重制の2つの様式があるが、この無縫塔は竿と中台の2つの部分を持つ重制で、高さは122cm、調和のとれた石塔である。応永9年(1402)に別峯国師が亡くなった後ほどなく作成されたものと考えられ、県の文化財に指定されている。そのすぐ西には**義則の宝篋印塔⑬**がある。これも応永34年(1427)の義則の死後まもなく建てられたものようである。端正な形の石塔だが、塔身部分などは風化が進みつつある。これらの東方には**姫路藩主松平直矩の息女2人の墓⑭**が並んでいる。この二基は地区で最も大型の五輪塔である。



⑫別峯国師 無縫塔



⑬赤松義則 宝篋印塔



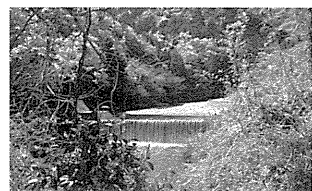
⑭松平直矩息女の五輪塔

円山神社⑮ 新庄の北西端の小高い丘の上に鎮座する円山神社は、里人が山之内の賀野神社から分霊を勧請したのが始まりであるという。現在の社殿は昭和初年に再建されたものである。神社の周辺はシイが成育し、天然林を形成している。



⑮円山神社本殿

城戸関跡⑯ 前之庄と山之内の境、木戸のダムの辺りでは、夢前川の流れに両側から山々が迫っている。中世にはここに城戸関があったという。元弘3年(1333)に後醍醐天皇が、配流先の隠岐島を脱出して京都に還幸する途中に書写山へ立ち寄った際、ここから山之内に入って土地の豪族のもとに滞在したという伝承が残っている。



⑯木戸のダム付近の景観

河原谷溪谷と亀ヶ壺⑰ 河原川が刻んだ溪谷が、山之内の入り口近くの河原口から亀ヶ壺まで8kmばかり続いている。川床はほとんどが岩盤や巨石から成り、その間を清冽な水が流れ下る。河原口から4.5kmほど林道が通じているが、そこから上流は道らしい道がない。川床の石を伝って何度も流れを渡り、歩きやすい所を選んで溪流沿いに進むことになる。分水界近くにある亀ヶ壺の滝は落差約25mで、その中ほどには直径3mほどの甕穴が形成されている。この付近の山は近世には郡境を越えて近隣各村の入会地で、江戸時代には争論も起こった。亀ヶ壺への途中には境界についての取り決めを刻んだ巨石⑱が苔むして残っている。

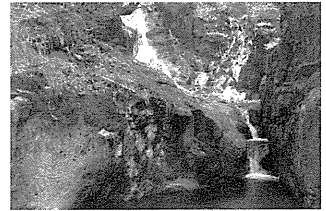
賀野構居跡⑲ 山之内の立船野に、赤松祐利・祐定などの居城だったという賀野(賀屋)構居跡がある。本丸は夢前川東岸の生福寺付近に、二の丸は川を挟んで西側にあったといい、本丸の背後に狼煙山がそびえている。そのすぐ北、山之内小学校の背後の山には鍋倉城の跡⑳がある。麓を夢前川が流れ、東・西・南は急傾斜の崖で北は背後の山々に続く、要害の地に築かれた中世の山城である。

馬頭の若宮神社㉑ 馬頭と西馬頭への道の三叉路の西北にある。中央に若宮神、右に若年神、左に稲荷神を祀る社殿がある。明治以後は若宮社が中心になったが古くは馬頭観音を祀っていたといい、それが地名の始まりになったと伝えられている。

賀野神社㉒ 山之内の坂根の山麓にある鳥居から参道が約2.5kmあり、谷を隔てて雪彦山の洞が岳の岩峰群を望む山の中腹に鎮座する。伝承では応神天皇が社殿を建立して伊弉諾・伊弉冊の2神を祀ったというが、本来は古代人の雪彦山信仰に始まる神社であろう。境内入り口に「牛馬安全」と刻んだ石柱が建てられているように農業や家畜の守護神としても知られた神社で、近隣だけではなく遠方の村々からの参詣者も多かった。また、推古天皇の時代に法道仙人が開いたという伝承をもつ金剛鎮護寺があり、明治初めの廃仏毀釈で廃絶するまで神仏習合の時代が長く続いていた。寺は神社の参道から少し下ったところにあり、山の斜面を削って作られた敷地の跡などが残る。この寺に安置されていた十一面観音立像は新庄の満願寺観音堂に、大日如来坐像は西馬頭の真楽寺の薬師堂に移され、保存されている。

雪彦山㉓ 中生代の生野層群に属する流紋岩や安山岩から成る山塊で、夢前川や揖保川の支流林田川の水源である。最高点である三辻山(915m)・洞が岳(884m)など多くの峰々からなるが、普通は洞が岳を指すことが多い。洞が岳はさらに大天井岳・不行岳・地藏岳などに分かれる。鋭い傾斜を持つ巨大な岩壁が連なり、神々のやどる聖地として古来信仰の対象であった。また修験道の山でもあり、行者堂跡という狭い平坦地も残っている。現在はロッククライミングのメッカとして著名であるが、一般の登山客も多い。洞が岳へは出雲岩を経由する登山道を利用するのが一般的で、危険な箇所には鉄鎖やロープが設置されるとともに登山道を示す標識が随所にある。福岡県と大分県の境にある英彦山、新潟県の弥彦山とともに日本三彦山の一つであり、雪彦峰山県立自然公園にも指定されている。

■編集 岩井 忠彦(近畿医療福祉大学特任教授)



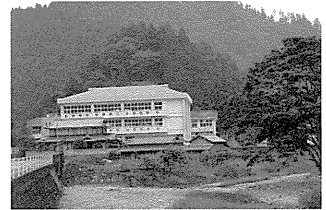
⑰林道終点付近の河原谷溪谷



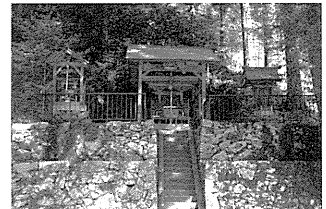
⑱亀ヶ壺山の堺石



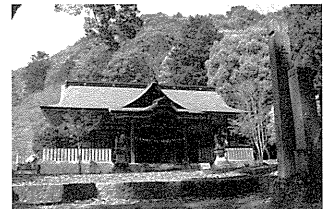
⑲賀野構本丸跡付近(左下)と狼煙山



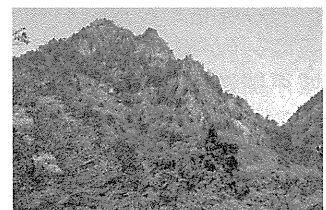
⑳鍋倉城跡



㉑馬頭の若宮神社



㉒賀野神社



㉓雪彦山洞が岳